大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

中国人の夢：孔子から明末まで(<特集>中国文化の深層,中江彬教授退職記念号)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大平, 桂一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004490

中国人の夢 —孔子から明末まで—

大 平 桂 一

本日お話させて頂きます、大阪府立大学の大平桂一と申します。今日の話のテーマは「中国人の夢—孔子から明末まで—」といたしました。私はもともと中国文学の分野で仕事をしていたのですが、最近は文学を逸脱して、健康法や夢といった新しい分野に挑戦しております。さて、中国の古代史において夢とのかかわりが最も深いのは孔子であると思われます。先ずは孔子からお話を始めたいと思います。

[1] 孔子と夢

孔子がシャーマンの家系に連なる人であった、というのは白川静先生の指摘（『孔子伝』中公叢書）ですが、おそらく事実でしょう。孔子は夢を通じていろいろなインスピレーションを得ておりました。（以下『論語』のテキストは岩波文庫本により、『礼記』のテキストは十三経注疏によった）

先生が言った、「ひどいねぇ、私の衰えも。長いこと周公の夢を見ていない。」（『論語』述而篇）

孔子は生涯たびたび周公の夢を見て、周公から直接言葉を掛けてもらい、その時々にとるべき行動について霊感を得ていたようです。長い間周公の夢を見ていない、という感慨は自分の肉体と精神の衰えを端的に示すものとして発せられたわけです。次の例は孔子が自分の見た夢を分析し、自らの死期を予言した話です。

孔子が朝早く起き、手を後ろに回し、門のあたりをぶらぶら歩きながら歌った、「泰山が崩れるだろう、梁が折れるだろう、賢人が萎れるだろう。」三度歌って室内に入り、扉に向って坐った。子貢が歌声を聞いて言った、「泰山が崩れたら私は何を仰ぎ見よう、梁が折れ、賢人が萎れたら、私は何を手本にしよう。」そこで走って室内に入っていった。先生は言った、「賜よ、お前はなぜこんなに遅く来たのだ。…私は昨日の夜、自分が東西の間に坐っている夢を見た（殷の礼では遺体を東西の柱の真ん中に置く習慣があった）。賢明な王が出現しない今、誰が私を尊敬してくれよう。これは私の死の前兆だ。」七日間床についてなくなった。（『禮記』檀弓上）

当時の人々は占い漬けといってよい日常を送っておりました。夢占いもその一部分です。孔子もその例外でなく、自分の夢には大きな関心を払っていたのです。

[2] 中国人の夢に対する反応

中国人はこの夢という不可思議な現象に対して三つの反応を示しました。一つ目は、夢占いの実践、二つ目は夢はなぜ見るのかという夢理論の確立、三つ目は夢を題材とした詩文の創作です。以下この三つの項目に即してお話を進めたいと思います。

[3] 夢占いの実践

周王朝には王の夢を専門に占う占夢官が存在していたとされます。漢代に編纂された『周禮』春官には「占夢」という官職が出てきます。

> 占夢官は今年の暦に基づいて、(夢を見た) 日付の干支を確かめ、陰陽五行の気の影響を判断し、日・月・星の動きによって六つの夢の吉凶を占う。(六つの夢とは) 正夢 (平静な気分の夢)、噩夢 (驚いて見た夢)、思夢 (目が覚めている時に思っていたことが出て来た夢)、寤夢 (目が覚めている時に言ったことが出て来た夢)、喜夢 (嬉しいことが出て来た夢)、懼夢 (恐ろしかった出来事が出て来た夢) である。

占夢官は夢の内容もさることながら、夢を見た日付の干支を重視して占いを行いました。ここでは挙げませんが、歴史書には夢を見た日の干支だけで占った例が多々あります。もちろん夢の内容で占った例もあります。次に挙げるのは古代歌謡集である『詩經』小雅斯干に載っている夢占いの例です。

> 下にイグサのむしろを敷き、上に竹編みのむしろを掛け、この寝室でゆっくり眠ろう。目覚めた後で私の夢を占ってもらう。縁起の良い夢は何かと言えば、クマやヒグマの夢、そして蛇の夢。お役人の占いによると、クマやヒグマは男子が生まれる兆し、マムシや蛇は女子が生まれる兆し。

ここに出て来ている「大人」というのはおそらく占夢官と推定されます。占夢官はもちろん民間ではシャーマンとして活躍する一面も持っていたでしょう。こうして蓄積されていったデータが占夢書 (解夢書ともいう) にまとめられていったのです。

現存する占夢書の大半は敦煌文書の中から発見されたもので、チベット語で書かれたものまで含めると十数種類あります。中でも周公に偽托された (そうではないという説もあります)『新集周公解夢書』一巻 (『敦煌本夢書』所収　鄭炳林・羊萍編　世界文化出版社1995年刊) は貴重であり、天文章第一に始まり、厭攘惡夢章第二十三に

終わる、かなり完備した占夢書です。今日はその中から人身梳鏡章第六を読んでみましょう。

頭を櫛で梳かす夢を見たらすべてバラバラになる兆し。

白髪になる夢を見たら、長生きの兆し。

結い上げた髪の夢は万事吉。

鏡の夢は、中が明るければ吉、暗ければ凶。

鏡が割れる夢を見たら、物事がバラバラになる兆し。

体から虫が出てくる夢は大吉。

土下座をする夢は、役所関係の心配事が起こる兆し。

古代ギリシアの解夢書（『夢判断の書』アルテミドロス著　城江良和訳　国文社1994年刊）のように、ある夢になぜある未来が対応するのかという論理が明らかにされていませんので、納得のいかない記述もあるのですが、おおむね常識的な連想が働いていると見ていいでしょう。

[4] 夢理論の確立

なぜ夢を見るのか、この問いに対する答えを古代の中国人はいくつか持っていましたが、ここでは一番単純な理論を紹介しようと思います。『靈樞經』巻七（引用は四部叢刊本による）の例を見て下さい。

欠損のある気が心に宿ると、丘・煙・火を夢に見る。肺に宿ると、空中飛行の夢や黄金や鉄製の奇怪な器物を夢に見る。肝に宿ると、山林や樹木の夢を見る。脾に宿ると丘陵や湿地帯、そして家を破壊するような暴風雨の夢を見る。…首に宿ると、斬首の夢を見る。脛に宿ると、歩いているうちに前に進めなくなたり、地下や穴倉に住む夢を見る。太股や腕に宿ると、儀式で拝跪する夢を見る。子宮に宿ると、小便を漏らす夢を見る。以上の十五の症例は、先天の気の不足によるもので、補充してやるとすぐに癒える。

『靈樞經』というのはれっきとした医学書なのですが、ここでも夢そのものとその原因に大きな関心が払われています。『靈樞經』の気による夢の発生メカニズムの説明は後世まで影響を与え、さまざまな医学書において同様な説明がなされています。

もう一つ古代人が関心を持っていた話題を追ってみましょう。それは、夢は現実を反映するのか、夢で見たことは果して現実なのか、という問いです。このことを思考実験によって確かめようとしたのが後漢の王充（27－101？）です。王充は諸子百家の学問に通暁し、伝統的思考に反発して『論衡』三十巻を著しました。王充は夢と現実

の関係についての思考実験をいくつか行っているのですが、ここでそのうちの一つを見てみましょう（引用は四部叢刊本による）。

もしある人が洛陽へ行く夢を見たとする（夢を見ている人はたぶん長安にいるのであろう）。もし現実に洛陽に行けたとすると、夢から覚める時も洛陽から覚めて来るはずである。夢は一瞬の内に覚めるのであるから、魂はなんと速く飛ぶことか！

故に夢は現実の世界とは無関係で、夢占いは成立しないと結論したのです。王充の思考実験はこれにとどまらず、死体の横で大騒ぎして、それを死人が知覚するか—王充は思考実験どころではなく本当にそのような事をした形跡があります、眠っている人の側でやはり騒ぎ立てそれを人が知覚するか、ということまで考えております。王充は睡眠と死とは同じ次元の現象だと結論付けているのです。

[5] 夢を題材とした創作

盛唐の李白・杜甫には夢を題材にした詩（「夢遊天姥吟留別」や「夢李白」）がありますが、夢の記録としては具体性を欠いています。夢の記録として価値を持つのはやはり中唐以後の詩であると言えるでしょう。よく言われることですが中唐で詩の世界に一種の革命が起こりました。天下国家に向っていた詩人の関心が個人の狭い世界に向うようになり、詩の題材としての日常生活が脚光を浴びるようになりました。その中で自分が見た夢を詩に忠実に取り込もうという機運が高まります。その中心人物が白居易と元稹です。彼らは元白と並び称される詩人でしたが、共通の関心を持っておりました。それが夢だったのです。

夢の中で台地に登ると、そこに深い井戸があった。高いところに登ったので喉がかわき、深いところの湧き水が冷たいかどうか確かめようとした。井戸のまわりを廻ってのぞきこむと、水面に自分の影が見えた。水面には落下した釣瓶が浮き沈みしたが、それを引き上げる綱がついていなかった。釣瓶が沈みそうなので、あわてて助けを求めに行った。台地の上の集落を訪ねまわったけれども、集落は空っぽで猛犬がとびかかって来ただけ。…土が厚かったので墓穴も深くなり、魂は深いところに埋められた。穴は深くとても出て来られそうにないが、魂は時に通り抜けられるらしい。今宵冥界の妻が、釣瓶になって私に誓ってくれたのだ。（『元氏長慶集』巻九　夢井　引用は四部叢刊本による）

元稹が見た夢は先立った妻の埋葬の場面が変化した夢で、詩人は自分で分析を行って知ったのです。今の夢はいったい何だろう何だろう、という問いかけの果てにそれが

妻の埋葬の場面が変化したのだということを知り、これはきっと妻の魂が自分に会いに来てくれたのだと書く詩人の心情には痛ましいものがありますが、彼のおかげで中国人が見た夢の歴史に燦然と輝く夢が記録されたのです。彼の友人であった白居易にも夢を詠んだ詩が数多くあります。この「夢井」（井戸の夢）という詩は長編の五言古詩で比較的詳細に夢を描写しているのですが、次の例は七言絶句で象徴的に夢を表現した傑作です。とても美しい詩なので原文も挙げておきましょう。

紅塵席帽烏靴裡　太陽が照りつけ塵が舞い上がる中、私は麦わら帽子をかぶり黒い靴をはいて歩いていた、

想見滄洲白鳥雙　ふと一つがいの白鳥が仙人の住まう島滄洲の上空を飛ぶという涼しげな情景を想像した。

馬齕枯萁誼午枕　馬がカチカチと豆殻を噛み砕く音が、わが家で昼寝する私の枕元に騒がしく、

夢成風雨浪翻江　その音は夢の中で風雨に変容し、長江に波が翻るのであった。

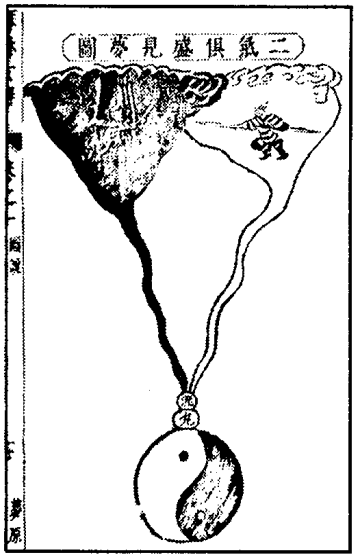
この「六月十七日晝寢」詩（『山谷内集』巻十一、引用は台湾芸文印書館本による）は北宋の黄庭堅（1045－1105）の作品です。うだるような暑さの中、埃舞う街道を歩いている時に見た清涼な白昼夢を描き、後半は家に帰り着き、午睡のときに見た実際の夢を描いています。つまり、猛暑の現実が涼しげな白昼夢に、馬がえさを食べる音声が暴風雨に波立つ長江に変容しているわけです。現代の評論家錢鍾書はこの詩を二つの夢を結合させた傑作としてたたえておりますが、まさにその通りと言えましょう。「あいまいに知覚されたどんなもの音も、それに応じた夢の映像を生み出す。雷の音は我々を戦場の真っただ中へ連れてゆくし、鶏の鳴き声は人間の悲鳴に変わるし、戸のきしる音は強盗侵入の夢を引き起こす。」（C.A.マイヤー著『夢の意味』創文社1989年刊行26頁に引くイェッセン1856）という近代の夢研究家に先駆ける観察力を詩人は備えていたわけです。余談ですが黄庭堅のこの詩は松尾芭蕉『奥の細道』の尿前の条に影響を与えました（拙論「芭蕉と黄山谷」『文学』季刊第9巻第2号1998年春参照）。

[6] 夢研究の全盛期明代

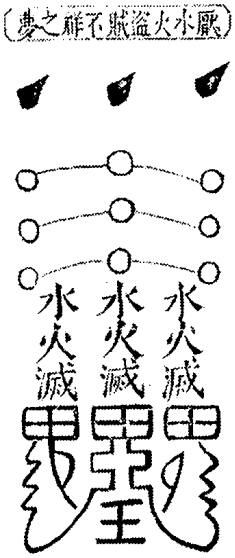
元の後を継けた明代は荒削りでありましたが、あらゆる分野において、それまで蓄積された知識や技術が統合整理された時代でした。明代には少なくとも夢に関する大部な百科全書が二種類出版されました。一つは易の研究者として有名な陳士元の『夢林玄解』であり、一つは劇作家として高名な張鳳翼の『夢占類考』です。

『夢林玄解』（引用は内閣文庫本による）は、元集（夢理論）、亨集（各代の夢理論）、

利集（悪夢を祓う技術論）、貞集（夢占い）という四部から構成されています。



陰陽二気闘争之夢



厭水火盜賊不祥之夢

ここに挙げましたのは、元集から取った、陰陽二気の消長によって見る夢が変化することを説明した図で、陰陽の二気がともに盛んであると闘争する夢を見ると説いています。次に挙げたのは利集に収められている悪夢祓いの符籙（お札）の一つです。このお札は、「厭水火盜賊不祥之夢」すなわち水害火災盜難にかかわる悪夢を祓ってくれるものです。

もう一つ、今度は貞集に載っている「湖中大戦」（湖の中で戦いが行われる夢）という夢占いの例を見てみましょう。

> 「湖」というのは「胡」（北方民族）である。「戦」というのは「占」である。帝王がこの夢を見たら、北方の異民族が国境を侵す兆しで、全く利益はない。一般人がこの夢を見たら、湖は水がたまっている区域で、水は利益のシンボルだから、湖の中で戦って勝利すれば、きっと大きな利益が得られよう。女性がこの夢を見たら、必ずすばらしい配偶者に出会えるだろう。

この条では同音の漢字、「湖」と「胡」、「戦」と「占」を使って占いを行っている点と、一つの夢を見てもそれを見た人の立場によって、占断が変わる点が興味深いのです。さらに重要なのは、占断の論理が丁寧に説明されている点で、前にあげた『新集周公解夢書』から大幅に改良されていることもわかります。

次に『夢占類考』（引用は内閣文庫本による）を見てみましょう。『夢占類考』十二巻は、（巻一）天象／地理／聖賢、（巻二）人身／彝倫、（巻三）飛鳥／走獣、（巻四）鱗介、（巻五）棟宇／成器／舟車、（巻六）帷服／紈綺／珍寶／医薬、（巻七）爵禄／旅常／名姓、（巻八）文翰／音楽、（巻九）灯火／什百／呼召、（巻十）陵墓／英霊、（巻

十一）冥感／輪廻、（巻十二）黄冠／緇流／説夢というように細かく夢が分類されています。それぞれのジャンルには、歴史書や小説集などから抜き出された、無数の夢に関する記事が収められているのです。すべて実話やリアルな物語で、夢を見た人は目録から見当をつけて記事を読み、自分の夢を占うのです。ここでは巻七の名姓から、「二人姓李乞命」（二人の李さんが命乞いに来た夢）を見てみましょう。

梁南郡の太守劉之亨が、ある時、李姓を名乗る二人がやって来て命乞いをする夢を見た。しかし之亨にはその夢の意味がわからなかった。翌日、ある人が鯉（「李」と同音）二匹を送ってきたので、之亨は、「これはきっと夢に出て来たあの二人に違いない」と言って放してやった。その夜二人が礼にやって来て、「あなたの寿命を延ばしてあげましょう。」と言った渚宮遺事。

「李」という姓の二人が夢に出て来たら、それが「鯉」二匹を意味すると解釈すべきである、この条はそのように教えてくれているわけです。このように同音の漢字を使って占いを行う方法は普遍的に行われていました。さっき挙げた『夢林玄解』の例でも同じ技法が使われていたのを覚えておられるでしょう。

[7] 夢研究の奇才董説

明の万暦年間の末に生まれ、清の康熙年間まで生きた人、董説（1620～1686）は21歳の時に『西遊記』を題材にした幻想小説『西遊補』を著しました。『西遊補』は主人公の孫悟空が鯖魚精という妖怪にたぶらかされて自らの精神世界に迷い込み、項羽の住む古人世界、閻魔大王の代理人となってはるか未来の奸臣秦檜を裁く未来世界を経て、再び『西遊記』の時空にもどって来る物語です。1643年、明滅亡の一年前、董説は神経症にかかり、一年間奇妙な夢を見続けました。彼はその一つ一つを枕元に用意した筆硯で記録し、その中から三十余りを精選して公刊しました。それが『昭陽夢史』（引用は『夢石樓十種』所収本による）です。その中から三条を下に選んでみました。

天雨字（天が雨を降らせた）

天が字を降らせた。始めは雪のようだったが、徐々に掌の大きさ位になり、色もまっ黒に変わってきた。わたしは天地創造以来、こんな妖怪は見たことがないぞ、とつぶやいた。易を立てて伏羲に訊ねてみようと思っていたら、高い冠と白い衣をつけた男が全力疾走して来て叫んだ、「不思議な眺めだ、不思議な眺めだ、今日天が字を降らせたが、それは一篇の「帰去来の辞」（陶淵明作）だった。」三月一日

天下皆草木（草や木だけの世界）

高い山にいて、下を見ると草や木だけの世界だった。人の影さえなく、驚いて大声で叫んだ。「これは草や木だけの世界だ、私は誰と口をきけばよいのか。」と言いつつ、私は慟哭した。起きてみると枕がぐっしょりと濡れていた。八月二日

天垂萬乳（天から無数の乳房が垂れてきた）

雲一つない空から突然無数の乳房が垂れてきた。徐々に長くなり、屋根瓦まで到達し、その色は赤と青であった。九月九日

一つ一つにきちんと日付がついていることにご注目下さい。董説がいかに自らの夢を正確に記録しようとしていたかがよくわかります。この『昭陽夢史』は中国の歴史上もっともリアルな夢日記であることは疑いありません。精神分析家にとっては最高の材料になるでしょう。董説はまた自分の夢の記録に基づき、独特の夢研究を行いました。

一、夢の類型論を確立

二、夢愛好者の結社設立

三、夢の薬効を研究

一については、「夢郷志」（夢が住む共同体を記録した作品）という文章があります。

玄怪郷…現実には経験しようもない不思議な夢が住む地域

山水郷…自然を題材とする夢が住む地域

冥　郷…魂が肉体を離れて見る夢が住む地域

識　郷…意識が城郭などを造形して見る夢が住む地域

如意郷…欲望が思いのままに実現した夢が住む地域

蔵往郷…過去の出来事が再現した夢が住む地域

未来郷…未来の出来事を予知する夢が住む地域

董説は夢の王国である夢郷の中を、上記のような七つの地域に分けているのですが、それが自ずと夢の類型論になっているという次第です。『周禮』の六分類に比べるとずっと近代的、文学的になっております。「夢郷志」にはさらに夢郷を統治する官僚組織が描かれており、董説独特の幻想的な色彩を帯びています。

二については、董説は多くの同時代人に向って、見た夢の記録を送ってくれと呼びかけた文章「夢社約」を書いています。その中で董説は夜寝る前、枕元に筆と紙を用意しておき、見た夢を絶対に加工することなく記録し、日付を明確にして、彼に送ってくれるよう、規約を定めています。

董説は重い心の病をわずらう中で、数多くの夢を見、それを記録する過程において、夢に心の病を癒す力があることに気がつき、「夢本草」（『豊草庵前集』巻三茗文編、引

用は呉興叢書所収『董若雨詩文集』による）という一文を書きました。三つめの夢の薬効研究はこの文章で展開されているのです。

夢本草

夢の味は甘く、性質は芳醇、無毒で叡智が増加し、血流が良くなり、エネルギーの滞りを解消し、心を浄化し、俗界から遠ざけ、長生きに導く。この薬は次の五箇所に産し、その中の二つが最良である。その一つは山水幽曠境に、もう一つは方外霊奇境に産出し、ストレスに起因する病を治療する。過去境に産出する夢を留夢といい、それを服用すると記憶がよみがえる。未来境に産出するものを未来予知の夢といい、現代の夢愛好者はみなこの夢をほめるが、これは人を俗化するし、悲しみや憂いを増すので、良薬ではなく、本物の薬を求める人は重要視しない。あと一つは驚境に産出し、驚境夢と呼ぶ。この夢は昏睡状態を解消するが、人を勝手気ままにふるまわせる。人は夢で病を治すが、この薬を作るのに水や火の力は借りない、目を閉じればすぐに完成する。この薬を採集する人は、季節に関係なく、毎夜採集せよ。

廬山の慧日雅禅師は禅本草を書き、私はそれに傾倒している。私の夢に対する嗜好はすでに持病となり、病ではなく薬と称するようになったので、この文章を書いた。禅は人の心の束縛を解くと言うが、今の禅の修行者は禅にしばられてしまっている。これは現代人が夢に言及する時に、吉だ凶だと余計なことを考えて、夢に束縛されるのと同じなのだ。

「夢本草」には、今見たように夢の類型論の改訂版が展開されています。「夢郷志」では七分類だったものが、「夢本草」では五つに減っており、よりシンプルになっています。すなわち、山水幽曠境、方外霊奇境、過去境、未来境、驚境の五つです。さらに注目すべきは、夢に病気を治癒する力があると主張している点で、おそらくそれ以前にはなかった観点ではないかと思います。

明代の夢研究はこの章で見て来た通り、それ以前の研究に比べて大きく飛躍しました。夢の研究に関しては黄金時代であったと言えましょう。

[まとめ]

以上中国人と夢の関わりをざっと見てまいりました。フロイトの『夢判断』には古代人の夢に対する見解を概観した章がありますが、残念ながら中国には言及されておりません。八十年代から中国大陸でもフロイトの学説が解禁され、多様な夢研究が展開されつつあるところです。古代中国人の夢に対する独創的な見解は、世界の夢研究

をさらに進めることができる、巨大な可能性を秘めているものと思われます。ご静聴有難うございました。

参考文献

夢的迷信與夢的探索　劉文英著　1989年中国社会科学出版社刊
中国夢文学史　先秦両漢部分　傅正谷　1993年光明日報出版社刊
中国夢文化　傅正谷　1993年中国社会科学出版社刊